

そこで東西文化の兩方が大切でありその部分々々を關係づけて考へて見たいと思ひます。

大東亞戰爭勃發以來急激に南方方面に目を向ける様になりました。ここに北米、カナダ、マレー、南米、アフリカ、ロシアのシベリヤ開發などの一通りを調査しその植民地の行政のとり來つた道を比較研究して悪い所は悪い、良い所は良いとするのが學者の任務ではないかと思ひます。

マレー、ビルマ、ボルネオ等に就いて實際調査を始めた夜も寝ないで勉強しなければならぬと思ひますが、それ等を凡て一つに壓縮してその精髓丈鍾めて一卷とした要領の好い世界史が欲しいと思ひます。

此點で白鳥博士の如き史學の大家に期待してをつたものが多いのであります。而も博士の逝去に遇ひ哀悼に堪へません。終りに再び故藤崎理事の親類として今日の追憶講演御開催の御厚情を感謝し厚く御禮を申し上げます。

三 藤崎白鳥二理事の

人格を仰ぐ

本會理事兼研究所長
文學博士

加藤 玄 智

唯今林會長からも追憶談がありました、この機會を利用して私からも白鳥藤崎兩氏の本會に對する御功績の一端を申し上げて兩氏を御追憶致したいと思ひます。

藤崎理事が亡くなられてから今日聽て十七年になります、この會の地方講演會が故藤崎理事の郷里仙臺でありまして、林會長・白鳥博士も御列席で非常に大規模な講演會が仙臺で開かれました。是れ偏に兩理事の御盡力による所多かつたのであります。

白鳥博士が學會に貢獻する所大であつたことは今更申上げるまでもないことと思ひますが、博士の薨去を哀んで、私は

かきのことすふみこそ君の命なれ

萬代までも御名はくちせじ

と口吟して腰折一首を靈前に獻じて哀悼の誠意を表しました。

本會が大正元年十一月三日に創立さるゝや、故藤崎大人も非常に共鳴され、我々學界の同人を財的に御援助下さいました。

白鳥、藤崎の兩理事の御熱誠に、私も大いに刺激せられ、理事として今日に至つたのであります。

學者には一刻も千金であり時間は惜しいのですが白鳥博士には常に本會の陣頭に立つて御盡力下され本會の研究に運営に大に御盡力下されました。博士の如き眞に實踐躬行の方であると思ひます。

博士は本會の學術的方向ばかりでなく財力の方面にまでも考へて下さいまして、或る時成田山の石川照勤師に話して財力の供出方を御自分でやつて見ようと約束して下さいました。しかるに當時博士はヨーロッパに出張を仰せ付けられ急に御多忙を極めてをりましたので、御約束の履行如何と心配致してをりましたが、洋航の途中スエズ附近から手紙を下さつて約束を果されたのであります。普通の方では出来ないことであります。白鳥博士は、かやうに自分で引受けたことは最後までやり通すといふ強い責任感をも

つてをられたのであります。

又本會に於て日本上代史に關した御講演をなさつたことがあるのであります。或る者が其御講演の一節を問題化しようとして反對意見を雜誌などで公にして、博士に挑戦してまゐつたことがあります。

私達心配致しまして一日先生の御宅に參りその旨をお傳へ致したのですが先生は毅然たる態度を以てあの講演は自分の信する所があつて發表したのであるから心配されることはないと言つたのであります。如何に學者として御自分の學問に自信をもつてをられたかと云ふことはこれを以ても御察し申すことが出来るのであります。

博士は東洋史は勿論、言語學上からも日本の古代の研究には深い造詣をもち非常に有益なる學術論文を發表なされ學界に貢獻されたのであります。

本會の幹部として先生と共に事を見る上に於て、私は常に先生の責任感が強烈であつたことを讚嘆すると同時に、學者として自信をもつてをられたことに敬服するのであります。

故藤崎理事に就きましたは、今より十七年前その追悼會の席上私は縷々述べて、それが本會の出版物にも載つてを

りますから、一切略しまして、今日は唯去る六月十六日、故藤崎大人の十七回忌辰に逢つて追悼の爲め、其靈前に獻げた腰折一首を御耳に達して、故人追憶の至情を表します。

十年あまり七度年は回り来て

昔をしのぶ今日ぞ悲しき

四 藤崎白鳥兩家を代表

しての謝辭

故白鳥博士嗣子
會員學習院教授

白 鳥 清

本日、藤崎大人、又故人になりました父の追憶記念講演會と、それに引續いて追憶晚餐會を御開き下され、私もその席にお招きをうけましたことを藤崎白鳥兩家を代表しまして會長はじめ本會に對して厚く御禮申し上げます。

父は本年三月に風を引きまして、元來しばし風を引くのでありますが決して醫者の藥を飲まないのです。家族の

者が心配致しまして、醫者を呼んで参りますと何でもないと云ふので實際これには困りました。

三年前に腦溢血をやつたのでありますが殆ど治つてをりましたが少し立居が不自由であつた様です。

家族の者で九十までは生きなくても八十までは大丈夫だらうと話してをつたのですが左の背中が痛いと申しますので醫者に來て貰ひましたら胸膜だといふのですが父はそんなことはないと言ひ切つてをつた様です。それで少し治つて來て急に起出したのですが又ぶり返したのです。三月二十七日に加藤繁博士が見えまして會談して過ごし、二十八日には父の説に對してヘルマンの反駁の論文が或外字雜誌にのつてをりましたのを私の俸に讀ませて非常に喜んで書いてをつたのです。然るに三月三十日になりますと餘り病氣が苦しい様でしたので醫者を呼んだのですが急に肺炎を起して息を引とつた次第であります。

右様な譯で父の一生が終りましたが、生前から父が、犬馬の勞を致したに過ぎない本會に於て、斯る意味深い追憶講演會と同晚餐會とを御催し下さつた事を衷心感謝致します。